

じゃんけんにかけて本を読むことになった、というユニークな書き出しの「未来へつなぐ」ですが、宮脇颯大さんは、この本からとても大きなものを得たと思います。その大きなものとは、想像力です。感情移入のできない本は苦手という宮脇さんですが、『危機の現場に立つ』には引きこまれたと書いてあります。読書にとって重要なのは、共感や感情移入ではない、想像力です。彼はこの本からそれを得て、紛争地域で暮らす人たち、働く人たちを想像し、彼らの身になって考えることができた。この本から得たものは、きっと宮脇さんを一生支え続けることだと思います。

「一人も残らず笑顔の世界に」の吉瀬菜城さんは、シリアで起きている悲劇、過去に広島で起きた悲劇を、遠い国のこと、遠い過去のことではなく、身近なものとしてとらえようとし、「平和とは何か」という大きな問いへの、身近な答えを、ご自身の言葉で得たのだと思います。

『バナの戦争』を読んで」を書いた細野真好さんの、ボランティアについて義務感を持ってしまっていた、やらなくてはならないと思っていた、という指摘を読み、「私もそうだったかもしれない」と、考えさせられました。義務感ではなく、「その国を思う」ということが支援だという、さりげなくも根本的な指摘に感銘を受けました。

「諦めないで」を書いた乾桜楽さんは、女の子だから差別される世界について、そういうこととは「ほぼ無縁と思われている日本」で生まれ育ったと書いていますが、じつは、ご自身の将来の目標について、「女性には無理」と言われています。「女性だから」という理由で、権利を奪われたり天引きされることは、今なお私たちの生きるこの社会でも行われていることを鋭く指摘し、その改善を力強く訴えています。「諦めないで」という言葉は、世界じゅうの女の子へ、そして、自分自身に向けた決意の言葉なのだと思います。私も応援します。

「僕にできること」を書いた篠原京都さんも、女性差別ははたして発展途上国だけの問題だろうかと疑問を投げかけます。そしてそのことに無自覚だった自分も加害者となる可能性があったと考えます。そのことに私は本当に心を動かされます。差別に関わる大人の多くは、そのような意識に対して無自覚です。その正反対のことを考え、自分にできることからしていくと決めた篠原さんを、私はとても立派だと思います。

男女に対する固定観念に反発を抱き、女子校に進んだという、『女子校』という選択、そしてこの先」の湯浅果奈さんの考えが、私にはとても新鮮でした。私も女子校出身ですが、「女子だけの世界」に少々マイナスイメージを持っていました。けれども湯浅さんの感想文を読んで、女子だけだからできることがあると、あらためて気づかされました。そういえば、今まで視察にいった国々で、村の女性だけを集めて話し合いをしたときに、彼女たちがのびのびと発言していたことを思い出し、「女性限定」の持つプラス面にはじめて思い至りました。そして、そこで得たものを、女性ばかりではない社会でどう生かしていくのか、ということは、湯浅さんだけではなく、また日本だけでなく、世界じゅうの問題であると思いました。そのことを、みごとに指摘してくれた感想文でした。

岡田光七